

硯友會和歌：文苑

著者	蝶二，溪川，江楠，松露，蘆月，基紀，山人，弘，求溪，やまひと，一心，子軒生，松浪，後藤，一雄
雑誌名	龍南會雜誌
巻	58
ページ	55 - 62
発行年	1897-06-29
その他の言語のタイトル	硯友会和歌：文苑
URL	http://hdl.handle.net/2298/4872

り。さる女のすみかと思へば、音なふだにもせず、きゝぬたるに、曲終りて、若き女の聲、して、花よ、今宵は、はやいたくふけぬ、戸さしてよどいひて、遣戸ひきし、後は物の聲もせず、やがて家路につけば、先の風流男も、今はみえず、たい大空の月の花の木間に、すみけるのみなりけり。

藤堂先生評曰、風神古に逼り、其妙即かず、離れず、未段曲終りて、江上數峯青し

和歌

阿蘇公の御館にて足利追討の

綸旨と螢丸の刀とをみ侍りけ

る時によめる

東園のあるじ

この勅うけて髣髴しこの君のたまこそひかれこの螢丸

波野原をすきて

行く人もなみのゝ原の花すゝきはに出てゝたれをうち招くらん

宇佐宮に詣てゝ

うさの宮みことかしてみ詣てけん心し思へは涙し流る

硯友會和歌

柳の下に人のたてゐるかた(兼題)

蝶

二

糸たれて若結つるらし川添の柳のかけに立てるをさな子

全

溪

川

青柳の糸によりくる人やたれこの世のちりをうちはらひつゝ

全

江

楠

夏くれば人の心も青柳の糸にひかれて立ちもよるらん

樹下讀書

松

露

たちかへり年ころなれし樹の下にふみよむ時をたのしかりける

全

蝶

二

木の下にふみよみをれば梢にもをとりはせしと蟬のなくなる

全

蘆

月

夏木立ならの葉蔭にふみよめは袂にかよふ秋の初風

全

江

楠

夏木立涼しきかけに文見れはくれゆく空のたゞまをしも

山亭對月

蝶

二

松の風谷の流れに月さえてすゝしき夜半は寝られざりけり

藤堂先生評、清絶

人とはぬみ山の庵も夕されはすゝしくすめり夏の夜の月

夜と共に水のこゝろにすむ月をむすふもろ手にうつし見る哉

全

ねはしまにさす月影のおちくれは流れの音もけにそすみける

全

のはりきて心にかゝる雲もなし月に宿かる峯のした庵

全評、許多曲折

かやう火の里の烟をふもとにて高くもすめる月の影かな

全評、占地歩極高

全

大空の月の影さへすみにけり浮世の外はやまかけのいは

全評、言在言外妙

全

山里の軒端のまつに影青くかゝるすゝしき月の影かな

送卒業生諸君

夏衣たちいてぬとも秋の日の雁のたよりはたえすれこせよ

全

いさゆきてあとよりたどる人のため學ひの道のみちをりせよ

全評、完璧

全

松

露

溪

川

山

二

蘆

月

江

楠

蘆

月

基

紀

山

人

にしきよて君やかへると思へどもわかれといへは惜しまるゝ哉

全評、眞奉

冬は雪夏ははたるをあつめてそ今日のはしきのはえはあるなれ

全評、いさよし全

籬邊梔子(即題) 風ふきて枝もなみけるかきのへに心静かにさけるくちなし

世の中をよそにしてすむ柴垣に植うへきものはくちなしの花

心はねども人にこそまれかをりつゝ籬にさけるくちなしの花

全評、人其廣哉全

夏 風

夏の來で木下風にすゝむにも都大路を思ひやらるゝ

ねひえける木立を渡る風こそは夏のも中の命なりけれ

夕立を催ふす山の風荒みなく子せおひていそく賤の女

全

全

全

全

全

全

全

山 人

松 露

松 露

溪 川

蘆 月

松 露

蝶 二

弘 川

溪 川

月かけのうつる渚のおしほより夏きら川の風をふきたつ
全許、すしき詩いはて身もさむく覺ゆ

草も木もまほみはてたる世の中をすくふとや吹く天の河風

全許、金槐集の尾にちておくべし

全

蟬の音もすしかりけり吹く風に夏のきえゆく森の下蔭

全

植ゑわたす野邊の稻葉に風ふけは波のうちよる心地こそすれ

麥 秋

かりとりてかつく田人にこそはん今年はこそをに麥はいかにと

全

豊かなるあきたの野邊に夏くれは麥の穂波のたゆる日そなき

全

さどくは今しも麥の秋なれやをみなわらはの立ちさわくなり

全

雨のふる日に吉丸君のきて尋ねきてあふそ

うれしき春雨に花もさきけり人もありけり

とまゆるかへし

蘆

月

山

人

松

露

蘆

月

山

人

山

人

弘

まゆやかにうたりつくさん春雨に花の咲きちることのかすく

漁村眺望

ゆふされは沖つ白波くれそめて空より落つるいさり火の影

拜聖庵の花みんと思ひしほどに一夜の

雨に散りけるときよて

思ひきや花のさかりと待ちわびしかひもあらしに散りにけるとは

千原の櫻を見て

ささしより朝な夕なに白雲のたゆる日そなき千原野の花

名にしあふ千原の櫻来て見ればたゞ一本に雲をみたる

早苗

白川に水にこりせり足曳の山田にけふは早苗とるらむ

全評、姿致多し

今日もまた早苗とるらむ千町田に賤の乙女の聲をよむなり

全評、これもよし

早苗とる乙女の小笠いくたびか子の泣くかたにふりむきにける

全評、あはれ深し

雨中杜鵑

はとよきすなく音もいたくまゆりけり晴るゝひまなきさみたれの空

基 組

求 溪

やまひと

白 人

一 心

扇

夕風のかよふ扇をたならしてつきまつほどそすゝしかりける
早苗によせて

さみたれに早苗とる子の雄々しさを見るもいそかし物學ふ身は
四季雜詠

子 軒 生

谷川に散りて流るゝ山吹の花にとはゝや春の行末
昔わか植ゑにし宿のあやめ草あやめつらしく咲き匂ふかな
山里も秋は來ぬらしこの葉ちるあらしをのほる月とさやけき
奥山の夜半の風音たえてのこる高根の月のさむけさ

菖蒲草

松 浪

去年ひさし人こそかはれあやめ草むかしなからの匂なりけり

藤堂先生評、寄托深遠

去年熊本にこんどきたる時松本氏と

扇をとりかへしゝ事を思ひ出てゝ

秋さてもなほすてかたき君か手にふれし扇の風のこひしく

全評、友情飄然

郭公聞きて故里の友思ひ出てゝ

音つれのたえにし友にはとゝきす夜半の一聲きかしてしかな

全評、古歌餘響

山亭對月

ちりの世を遠くはなれし宿なれば月もすゝしくすみわたる哉

曉杜鵑

後藤一雄

松影に夜をはのこして有明の月にきえゆく山ほととぎす

雜報

◎卒業生諸兄と送る

我同學百六十の諸兄今將に業を卒へて我龍南を去りなんとす、吾人何の言を以てか諸兄を送りまつらん、離歌を歌うて悲しきをいふは吾人の欲せざるどころ。思ふに國家多事、人心日に荒み、流俗相率ひて輕佻浮華、上は衣冠の人より下は走卒の輩に至るまで滔々として皆此渦中に沈む、心に廻瀾を期し、胸に經綸を抱くもの、天下幾何かある。大學は人材の淵藪にして、悉く是濟濟たる多士、天下の木鐸を以て任ずるもの、然る

を、聞く、人一たびこゝに入れば忽ち前日の面目なく、氣弛み心衰へ、少壯の氣去りて悉くかの凡俗となり畢んぬべし、と、吾人固より此言を信せずと雖、希くは今まで諸兄が龍南にありて、吾人を訓誨誘導し給ひしが如く、尙益卓落たる慷慨の心を以て、洛陽の士人を風靡し、刮目見るべきものあらざめよ。平生の厚誼に馴れて言語頗る禮を失ひ、先進に對するの道を飲げり、されど笑ふて吾人の言を嘉させ給はば、幸福何物か是に加へん。別に臨みて情盡さずと雖、言ひ能はず。時下酷暑に向はんとす、幸に自愛せられんことを希ふ。

◎休暇來る